


The legend of OBASAN



ここにいます  
「がん電話情報センター」  
あなたの知るを助けます

ancer

(全国一律の電話料金でご利用いただけます。  
PHS、一部のIP電話からはご利用いただけません。)

おーここにじょうほう  
**0570-055224**  
受付時間：平日 12:00~17:00  
(土日・祝祭日・年末年始・夏期休業を除く)

ともかく読書人間で、3分あれば本を開く。小説はもちろん、ドキュメンタリー、コラム、歴史、哲学、宗教、科学、心理学…、私なりに手紙を感じたものなら何でもよい。読書からは、想像の翼という贈り物ももらえる。人は、たとえ数秒でも自分自身から出ることはできず、「いま居る場所」で生きるしかない。だが読書は、どこへでも瞬時に行けてくれる。1億光年離れた天体へも、1万年昔にも未来にも。日々、神経がする滅亡のことも多い。それはそうだ。暮らしても仕事も他者との関わりなしには成立せず、人へは、お互いの主観(主張)を調整し合うことがつながっている。だからお互い、多少の疲れは避けられない。だからこそ文字を追ってはるか彼方へ、遠い昔へ、異国の街角へと飛翔させてもらう。すると自己中心の考え方がほぐれて、心の凝りが和らいでいく。



NPO法人血液情報広場・つばさ理事長、  
がん電話情報センターCTIS相談主任、  
日本骨髄バンク(骨髄移植推進財団)常任理事

橋本 明子

彼女は笑いながら「わからない部分は飛ばして、読むの。全体がいつ。私はこれらの現代小説を通して、現在につながるのだから」。なるほど、彼女の生き活きた感性はこうして磨かれているのか、と、脱帽する思いだった。

## 「伝説のおばさん」のオススメ 9

想像の翼を広げ、異国の街角へ  
心の凝りを解き放つ、  
読書の魅力



Akiko Hashimoto

『華氏451』(レイ・ブラッドベリ)は60年以上前の出版だが、全く古さを感じない。書物が禁じられた世界で、焚書官(本を焼き払う担当のひと)が読書の魅力に目覚めてしまっ、という内容で、読む喜び、想像の領域を持つ自由への賛歌が読み取れる。ちなみに華氏451は紙に着火する温度のこと、映画にもなった。

つい最近、ある年の離れた友人(70代後半)をお訪ねする機会をいただいて、驚いたことがあった。テーブルに『文藝春秋』があり、「芥川賞候補作の『ピッチマグネット』が面白かった、とおっしゃるのだ。「最も新しい『いま』を読むのもとても楽しい」、と。以前から読書好き同士で話が合うが、それにしても思い、失礼を顧みずに訊いた。「あまりに若い作家は、文中に携帯電話やインターネットなどが出て来て、違和感はないですか?」。